習ってよかったをすべての人へ　Issued by Learning Studio Azamino　2019年6月1日 発行　第71号

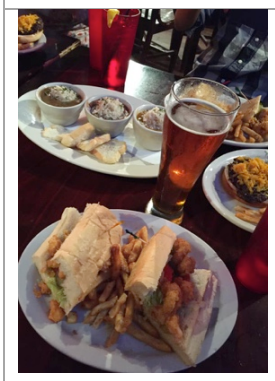
月刊 語学のススメ新聞 6月号

Rie's Column　"Trip to Chicago & New Orleans"

皆さんこんにちは、スタッフのRieです。今回は、GWに行ったシカゴとニューオーリンズについて書こうと思っています。以前の新聞にもブルースなどの黒人音楽が好きな事は書いたと思いますが、今年のGWは10連休と言う事で休みが多めに取れた音楽仲間と「では、みんなで行こう！」と言う事になったのです。ニューオーリンズと言うと、私にしてみれば、いろんな文化が混じり合ったアメリカ南部の街、ジャズの発祥地、マーチングバンド、、黒人霊歌である「聖者が街にやってくる」（聖者の行進—When The Saints Go Marching In）は、皆さん一度は聞いた事があるのではないでしょうか？そしてニューオーリンズのマルディ・グラはリオのカーニバルと同じく世界の主要カーニバルの一つになっています。今回は、4月の終わりから2週にかけての週末に行われるニューオーリンズのJazz Fesが目当てでした。毎年行っている友人数人と、海外旅行久々とかアメリカ初めてと言う方、そして数年前から行きたいと思っていた私でした。私にしてみれば夢が実現したというところです。

Jazz Fesとは言うものの、内容はというと競馬場に設置された10個ぐらいの大小異なるステージで、ゴスペル、ブルース、コンゴ等からのアフリカン音楽、そしてブラスバンドのセカンドライン、サザン・ロック、カントリーロック等等、、地元のミュージシャンはもちろん、アメリカ全土、そして他の国から来ている多くのミュージシャンが入れ替わり立ち替わりライブを繰り広げるのです。お昼の時間から夕方にかけて、それはもうお祭り騒ぎです。（笑）私達が行ったのは2週目にあたる5月2日からで、私は土日のみフェスに行きましたがとにかく街中、コンサートホール、ライブハウス、バー等昼夜を問わずそこら中でライブが観れます。5月のニューオーリンズはかなり暑く、日中は30℃ぐらいになるので、野外でもテ ↗

ントがある所はありますが、大きいステージは炎天下の中、立って見てるのでかなりの体力勝負です。でも、辺りを見回すと結構年配（！）の方々が多く、踊りまくっているのですよね。（笑）観たいバンドのスケジュールがちょっと重なってたりすると、人混みをかき分け大急ぎで移動、という感じでして、、この数日間ニューオーリンズ料理のPo Boy（牡蠣やザリガニ等の揚げ物が



入ってるサンドイッチ）やガンボ（燻ったソーセージ等が入った具沢山スープ）等、結構コッテリした物を食べ続けていましたがそれほど激太りしませんでした。（苦笑）ニューオーリンズはルイジアナ州にあるのですが、ルイジアナはフランス領だった歴史があり、パリ条約後は一時スペイン領だった時もありますが、フランス系住民が多かったせいか、街の中心地のフレンチクォーターにはフランス植民地時代の趣がある建物が並ぶストリートが続きます。あ、そう言えばベトナムもこんな感じ！と去年 ↗ 行ったベトナムを思い出したりもしましたが、こんがらがった電線はなく、バルコニーにはお花が溢れているのでとても綺麗です。そしてやはり音楽の街、ニューオーリンズ！一番の繁華通りのバーボンストリートはあちらこちらから大音量の生演奏が聞こえワイワイ状態です。ハリケーンと言うCock(雄鶏)の形をした入れ物に入ったCocktail(シャレです)を飲みながらstrolling around(ぶらぶら歩く)、、本当に楽しかったです。　Rie

元気が出る!!　今月のおすすめの一冊

先日小学生の生徒さんからこんな素朴な質問を受けました。「日本ってなに教なの?」さすが当校の生徒さん! 世界で宗教がらみのテロが起きている中で根本的な問題に疑問を持ったのでしょうか? ここで変なことを教えてはいけないと思った小林は、自分の考えをお話ししました。

日本はね、昔から「やおよろずのかみ」っていってね、800万の神様がいる国でね、日本の宗教は一般的には「しんとう」だろうね。昔は人口も少なかったから、西暦700年当時で言えば人口よりも2倍も神様が多い国だったんだよね。まあ、だからかもしれないけど、昔の日本人は仏教でも、キリスト教でもイスラム教でもね、800万の神様がたかだか2〜3人増えるだけなんだからなんでもWelcomeだったんじゃないかなぁ。日本においては、どんな神様たちも争わず仲良くできる、そもそも平和な宗教の国なんだと僕は思うよ。

それを聞いた小学生の生徒さんはキョトンとした顔をしていましたので、伝わったのはかなり疑問。僕もまだまだ説明のスキルを上げていきたいと、なんだか煮え切らない思いが残っていました。そんな時に本を読むとだいたいそこにヒントがあったりするから面白いです。

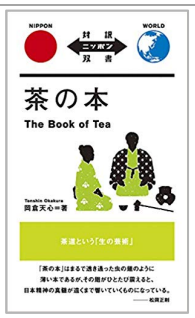
なぜ日本は平和な(宗教の)国なのか? それは茶の心にあるように、元々日本人は自らが人間的に成長することを大切だと考えているからです。欧米の人々は、より多くの富と権力を得ることを大切だと考えているのに対して、日本人はそんなことに高い価値をおかず、人生のささやかな出来事の中に大切なものとか偉大なものを見つけられる心の豊かさや美しさを生涯をかけて研鑽しようとする人たちだったからです。人生の微妙な情感に機敏で、現実の悲しい出来事に思いやりがあって、他人が言ってほしいと期待している以上のことは口にしないと言う礼節があって、どんな状況におかれても毎日毎日が素晴らしいと感じられる…、そんな心を養えれば平和になるに決まっていますよね。

ということで、今月のお勧めの一冊は、著者自身が「お茶」から教わった気づきをまとめたノンフィクション。映画化もされ樹木希林さんの遺作の一つでもある、**森下典子著『日日是好日(にちにちこれこうじつ)』**です。何と言ってもこの本は森下さんの実体験からの自然な気づきの数々が書かれているので、日本人なら「あっ、そんなお稽古を続ければ、きっと森下さんのように感じられる境地までたどり着けるんじゃないかなぁ」とその気にさせてくれるんですね。詳しくは本書をお読みいただくといたしまして、僕がとっても心に残ったところだけでもご紹介いたします。

障子が開いた。先生は両手を膝の上にそろえて置き、私たち生徒をちゃんと見て、自然にすうーっと頭を下げ、一瞬止まったと思うと、おもむろに頭を上げた。それだけだった。なのに胸を突かれた。鳥がほんの一瞬、きゅっと小さく身をすぼませたと思うと、ふわりと元に戻る仕草をする。それに似ていた。先生は今、私たちに「敬意」を表した。慎み深く、謙虚に、それでいて卑屈さがなかった。おじぎは、ただ、「頭を下げる」ことではなかった。頭を下げるというシンプルな動きに、あらゆるものが含まれていた。「形」そのものが「心」だった。いや、「心」が「形」になっていた。(pg. 76-77)

滝のような雨が、ザァー！っと、先生の家を包み込んだ。怖い程だった。南側だけ雨戸を閉めた薄暗い稽古場が、異様な雰囲気に包まれた。雨音が凄くて、なんだか心細くなった。台風の夜を思い出した。不安なのに不思議にワクワクして、みんなを急に親密に感じた。
「ザァ――――――――――――――――――――！」
木造の一軒家のすべてが、雨音にかき消されそうだった。あまりに大きな雨音で、室内にいながら外の雨が見えるようだった。(中略) 雨音の一粒一粒まで、聞こえる気がした。(中略) こんな風に一心に雨を聴いたことはなかった。雨音の密林の奥深く、分入っていくような気がした。ドキドキする。生々しくて、なんだか恐ろしい。だけど、もっと先へ分け入りたくなる。私は「耳」そのものになった。急激に聴覚が膨張するような感じがして、そして、一気に何かを突き抜けた……。(中略)
ここはどこだろう? 私をさえぎるものは何もなかった。
手順を間違えてはならないという緊張も、抱え込んだままで常に気にかかっている仕事も、今日帰ったらしなければいけない用事も、何もなかった。自分はもっと頑張らなくてはダメだという思いも、他人から好かれ評価されなければ自分は無価値なのではないかという不安も、人に弱みを見られたくないという恐怖感も、消えていた。とてつもなく自由だった。(中略)
どこまで遠くへ行っても、そこは、広がった自分の裾野だった。ずーっとここにいたいし、どこかに行く必要もなかった。してはいけないことなど、何もない。しなければいけないことも、何もない。足りないものなど、何もない。私はただ、いるということだけで、100%を満たしていた。(中略)　たぶん、ほんの数秒か、数十秒のできごとだったのだと思う。(中略)　私は、何気なく、後ろを振り返った。体をねじって見上げた視線の先に、掛け軸がある。短い掛け軸に、大きく2文字、書かれていた。**「聴雨」**（……「雨を聴く」！）
「ザァ――――――――――――――――――――！」
雨音に包まれながら、私はその時、決定的な場面に立ち会ったように感じた。まるで符牒が合って、開かずの扉が開いた瞬間みたいだった。(中略) 「雨の日は、雨を聴きなさい。心も体も、ここにいなさい。あなたの五感を使って、今を一心に味わいなさい。そうすればわかるはずだ。自由になる道は、いつでも今ここにある」
私たちはいつでも、過去を悔やんだり、まだ来てもいない未来を思い悩んでいる。どんなに悩んだところで、所詮、過ぎ去ってしまった日々へ駈けもどることも、未来に先回りして準備することもできないのに。(中略) 雨の日は、雨を聴く。雪の日は、雪を見る。夏には、暑さを、冬には、身の切れるような寒さを味わう。……どんな日も、その日を存分味わう。お茶とは、そういう「生き方」なのだ。そうやって生きれば、人間はたとえ、まわりが「逆境」と呼ぶような事態に遭遇したとしても、その状況を楽しんで生きていけるかもしれないのだ。私たちは、雨が降ると、「今日は、お天気が悪いわ」などと言う。けれど、本当は「悪い天気」なんて存在しない。雨の日をこんなふうに味わえるなら、どんな日も「いい日」になるのだ。毎日がいい日に……。(中略) その時、自然に薄暗い長押の上に目が行った。そこにいつもの額がある。「日日是好日」（……！）ずっと目の前にあったのに、今の今まで見えていなかった。「目を覚ましなさい。人間はどんな日だって楽しむことができる。そして、そのことに気づく絶好のチャンスの連続の中で生きている。あなたが今、そのことに気づいたようにね」そのメッセージが、ぐんぐん伝わって胸に響く。(pg. 211-219)

お稽古を始めたばかりのころ、私が「なぜ?」「どうして?」と質問を連発すると、先生はいつも「理屈なんか、どうでもいいの、それがお茶なの」と言った。理解できないことがあったら、わかるまで質問しなさいと学校で教育されてきた私は、面食らったし、それがお茶の封建的な体質のように思えて反発を感じた。だけど今は、1つ、また1つと、自然にわかるようになった。10年も15年もたって、ある日、不意に、わかる。(中略) お茶は、季節のサイクルに沿った日本人の暮らしの美学と哲学を、自分の体に経験させながら知ることだった。本当に知るには、時間がかかる。けれど、「あっ、そうか！」とわかった瞬間、それは、私の血や肉になった。もし、初めから先生が全部説明してくれたら、私は、長いプロセスの末に、ある日、自分の答えを手にすることはなかった。先生は「余白」を残してくれたのだ…。「もし私だったら、心の気づきの楽しさを、生徒に全て教える」…それは、自分が満足するために、相手の発見の喜びを奪うことだった。先生は手順だけ教えて、何も教えない。教えないことで、教えようとしていたのだ。それは、私たちを自由に解き放つことでもあったのだ。



学校では、決められた時間内に、決められた「正解」を導き出す考え方を習う。早く正しい答えを出すほど優秀だと判断され、一定の時間を過ぎたり、異なる答えを出したり、またそういう仕組みに馴染めない場合は、低い評価が下される。けれど、お茶をわかるのに時間制限はない。3年で気づくも、20年で気づくも本人の自由。気づく時がくれば気づく。熟成のスピードは、人によってちがう。その人の時を待っていた。理解の早い方が高い評価をされるということもなかった。理解が遅くて苦労する人には、その人なりの深さが生まれた。どの答えが正しくて、どれが間違っている、どれが優れていて、どれが劣っているということはなかった。(中略)　あれほど、「人を型にはめるがんじがらめの世界」だと思っていたのに、実はすべてが自由だったのだ。(中略) 学校もお茶も、目指しているのは人の成長だ。けれど、一つ、大きくちがう。それは、学校はいつも「他人」と比べ、お茶は「きのうまでの自分」と比べることだった。(pg. 226-228)
いかがですか? 日本人はみんなが、きのうの自分との比較の上で人間を高めようと、(宗教とでも呼べるような生き方で)生きた結果、きっと、平和で住みやすい社会が作られてきたんでしょうね。

1906年に英文でニューヨークで出版された、**岡倉天心**の**『The Book of Tea』**も、日本文化の審美・内省・調和を世界に知らしめんとした傑作です。天心は、日露戦争に勝ち浮かれ気分で欧米帝国主義に追従する日本に警笛を鳴らし、米国人の日本への理解をなんとか得ようとして…そんな背景があります。

また最近当校のJustin先生が、日本文化を紹介する映画に出演されました。そのお茶会の様子が、YouTubeにてVR映像でご覧いただけます。**What is "omotenashi"? Attend an authentic Japanese Tea Ceremony and find out what is at the heart of Japanese hospitality. A seat is ready and waiting for you.**
★こちらで検索→「**Japanese Tea Ceremony VR180**」　　*まとめ小林義和*

Rie's English Column

先日某生徒さんから「直接話法・間接話法で混乱してしまうのです。」と言うお話を聞き、確かに日本語では「彼が私に、、、と言ったんですよ。」のように「誰が、誰に」とあえて言わないですよね。
例えばこの学校でも講師に生徒さんのお休み等をお伝えする時にこのような状況になります。
Mr. Sato called and told me that he was (is) feeling sick.　（今現在の状況が変わってない間接話法は「人の言葉」の部分は現在形も可）
これを直接話法にすると、
Mr. Sato called and said (to me,) "I am feeling sick."となるわけですよね。
でも通常英語では、その人の言い方を真似るとか、有名なセリフを言うとか以外は間接話法で人に伝える事が多いと思います。
そうするとここで、**tell(told)**か**say(said)**かどちらにすれば良いのか？という問題が生じます。目的語である「誰に」言ったというのを明らかにしたい場合は"told"になります。**「主語 ＋told＋ 人」**　とはいえ、英語だけで書いてある文法本やNativeが話しているのを聞くと人の前に **"to"**を入れれば両方使われているので、その時のニュアンスでどちらでも良いと思います。
「主語 ＋said＋to 人」　　しかしながら **"told"**の後に人を入れずに**that**で続ける事は出来ません。**He told that he was...** ←間違え
間接話法でよく使われるのに提案である**suggest, insist, recommend, demand, request**があります。**"suggest"**を例に取ると下記のようになります。
His doctor suggested that he should get some rest.
His doctor suggested he should get some rest.
His doctor suggested that he get(主語がどうあれ原形です)**some rest.**
His doctor suggested he get(主語がどうあれ原形です)**some rest.**
どれも正しい文です。「人の言葉」の部分を原形にするのに違和感があったら**should**を入れれば良いですし、このルールは**"suggest"**が提案という意味の場合に適応されます。間接話法は奥深いですね。またの機会に続きを書きたいと思います。　　Rie